

不育症とは

【不育症とは】

妊娠するけれど、2回以上の流産・死産もしくは早期新生児死亡を繰り返し、生児を得られないことを言います。異所性妊娠（子宮外妊娠）や絨毛性疾患（胎状奇胎など）は流産回数に含めません。

なお、妊娠反応は陽性となったにも関わらず、子宮内に胎嚢が確認されずに月経が来てしまう生化学的妊娠（化学妊娠）も現在のところ流産には含めていません。

【不育症の頻度】

流産は全妊娠の10～15%の頻度で起こります。この頻度は女性に加齢に伴い、増加します。

厚生労働科学研究班では妊娠歴のある女性のうち38%の方が1回以上の流産を経験しており、2回以上の流産を経験した人は4.2%、3回以上の流産は0.88%と報告しています。

正確な数は不明ですが、2回以上の流産経験のある不育症患者は数万人と推定されています。

【不育症のリスク因子】

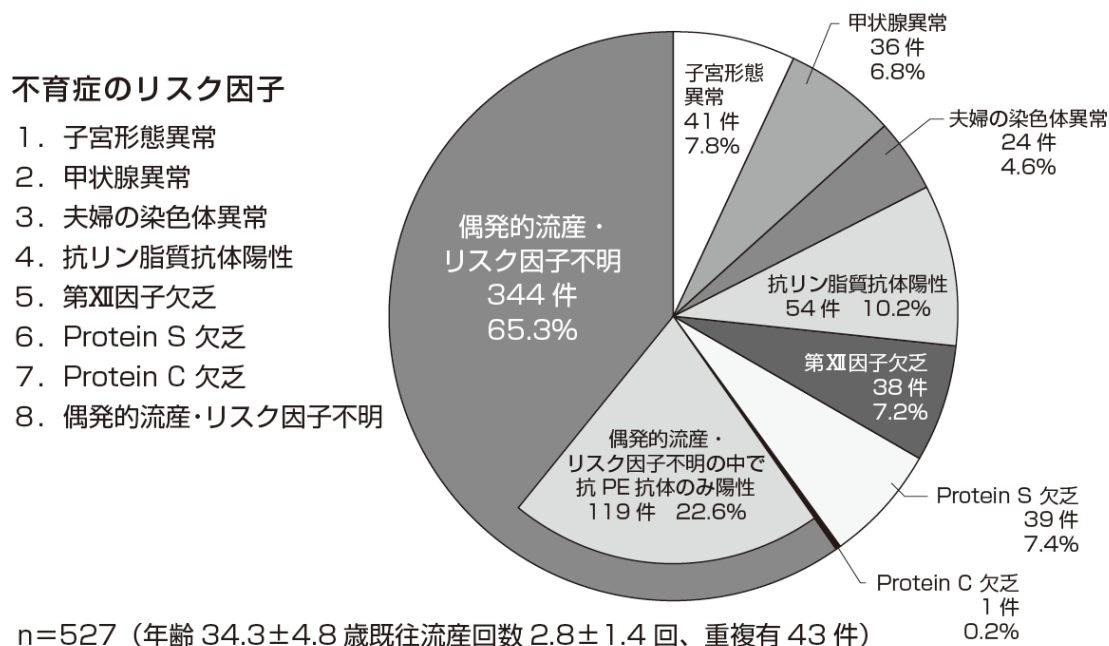
妊娠初期の流産の原因の約80%は胎児（受精卵）の偶発的な染色体異常とされています。

流産を繰り返す場合には、その他に、流産のリスクが高まる『リスク因子』を有することがあります。リスク因子がある場合でも100%流産するわけではないので、『原因』ではなく『リスク因子』と表現しています。

厚生労働科学研究班が調査した「不育症のリスク別頻度」は図1の通りです。

自己免疫異常の抗リン脂質抗体陽性は10.2%、第Ⅻ因子欠乏を含む凝固異常は14.8%、子宮形態異常は7.8%、甲状腺異常は6.8%、夫婦染色体異常は4.6%であり、偶発的流産・リスク因子不明が半分以上を占めています。

図1. 不育症のリスク別頻度



自己免疫異常

母体に自己抗体が作られると、免疫に異常が生じます。

これにより胎盤内に血栓が出来やすくなり、妊娠維持に障害を起こすことが指摘されています。

特に抗リン脂質抗体という自己抗体によって引き起こされることが分かっています。

凝固異常

第Ⅻ因子欠乏症、プロテインS欠乏症、プロテインC欠乏症などの一部では、血栓症などにより、流産・死産を繰り返すことがあります。

また流産・死産とならなくても、胎児の発育異常や胎盤の異常を来すことがあります。

子宮形態異常

子宮筋腫（粘膜下筋腫）や双角子宮、中隔子宮などの子宮の形態異常がある場合には、血流障害が起こり、流産の原因になることがあります。子宮の形によっては着床障害になる場合もあります。

内分泌・代謝異常

甲状腺機能亢進・低下症、糖尿病などでは流産のリスクが高くなります。早産等の産科合併症のリスクも高いため、妊娠前から妊娠中にかけて、良好な状態を維持することが重要です。

夫婦染色体異常

夫婦のどちらかに均衡型転座などの染色体構造異常がある場合、夫婦ともに健康ですが、卵子や精子ができる際に染色体に過不足が生じることがあり、流産の原因になります。

- ※ これらの『リスク因子』のほか、「肥満」「喫煙」「過度のアルコール摂取」「過度のカフェイン摂取」も流産率を高める可能性が指摘されています。